

マタイ受難曲の音楽的構造(第2回)

前回(第20号)とその付録として発行した「マタイ受難曲の楽曲構成一覧表」で、音楽全体の大まかな外観はご覧いただけたと思います。今回からは少し内容に踏み込んだ話を致しますが、その前に楽譜について触れておきます。

お手許のヴォーカルスコア(ベーレンライター版 BA5038-90)は、J. S. バッハ研究所(ゲッティンゲン)とバッハ・アルヒーフ(ライプツィヒ)の共同編集による「新バッハ全集(NBA)」のシリーズⅡ「ミサ、受難曲、オラトリオ作品」の第5巻「マタイ受難曲」(アルフレート・デュル校訂 ベーレンライター版 BA5038)からピアノ伴奏譜として編曲されたものです。底本となった新バッハ全集版マタイ受難曲は、その原典を現在のところ決定稿と言われる1736年にバッハ自身が浄書した総譜に依拠しています。バッハの手書きによる楽譜の表紙には、イタリア語で「福音書記者マタイによる我らの主イエス・キリストの受難。ヘンリーツィ氏、別名ピカンダーによる歌詞。G. S. バッハの音楽」と記されています。名前の頭文字がJではなくGになっているのはイタリア語でヨハンに相当する名前はジョヴァンニであるからです。(イタリア語でバッハのフルネームは Giovanni Sebastiano Bach と書きます。イタリア語の発音で Bach は何と読めばいいのでしょうか。アメリカにリチャード・バックという詩人がいますが、その綴りは Richard Bach ですから、ドイツ語読みではリヒャルト・バッハですね)

マタイ受難曲は1727年の聖金曜日に、バッハがカントールを勤めるライプツィヒ聖トーマス教会で初演された後、1729年、1736年、1742年頃、1743年または1746年の少なくとも4回以上再演されており、1736年には作曲者自身により改訂され、その時の自筆総譜が残っています。何故それがわかるかというと、1729年の上演に際して使われた総譜(バッハの娘婿アルトニコルによる筆写譜)が残っていて、バッハの自筆総譜との間に相違があるからです。改訂がこの一回に留まるかどうかは、裏付けとなる資料がないためわかりません。ちなみに同じくバッハ作曲の「ヨハネ受難曲」は初演と3回の再演に用いられた4種類の総譜が現存しており、その都度改訂されたことが知られています。(初演から102年後の1829年、歴史的なマタイ受難曲の蘇演が行われたときは、指揮をしたメンデルスゾーンにより、ロマン派全盛期の音楽事情を反映した大幅な改作が行われました。当時「マタイ」の初演は1729年とされていたので、初演から1世紀に当たる1829年を蘇演の年として選んだのでしょうか。)現在行われている「マタイ」の演奏は大半がこの版によるもので、まれに初期稿が用いられます。

1951年のバッハ研究所設立から2007年の完結まで、57年間にわたる新バッハ全集の編纂と刊行が終わった今、マタイ受難曲の楽譜に新たな情報が加わる可能性はほとんどなく、その意味で新バッハ全集版はこの音楽の楽譜の決定版と言って差し支えないでしょう。なお国内で「マタイ」の総譜は音楽之友社からミニチュアスコアが出版されています。

前回から始まった本シリーズはマタイ受難曲の音楽的構造を明らかにするべく書き進めています。多くの人々が指摘するように、バッハの音楽はゴシックの教会建築にたとえられる確固とした構造に支えられており、その全体像を明らかにするには音楽を構成する大きな枠組み(躯体)から、その中に用いられた合唱、アリア、レチタティーヴォなどのディテール(調性・リズム・編成・声部など:内・外装)までを見極めることが欠かせません。

と言うわけで早速マタイ受難曲の枠組みから見て行きましょう。まず、この音楽が大きく2部に分かれている理由は、聖トーマス教会で受難曲が演奏される聖金曜日(受難の金曜日)の礼拝では、第1部と第2部

の間に牧師による説教が入るからです。言い換えれば受難曲は説教を挟んで演奏されるということでもあります。当時ライブツィヒのルター派教会では、通常カンタータ 1 曲が演奏される主日(日曜)礼拝でも、朝 7 時に始まる主要礼拝の長さは(1 時間と決められた説教を含めて)、3 時間から 4 時間にも及んだそうです(ギュンター・シュティラー著 杉山好訳「バッハとライブツィヒの教会生活」「バッハ叢書」第 7 巻 白水社 1982 年による)から、「マタイ」を上演した聖金曜日の晩課礼拝は、夕方から始まって深夜まで続いたことでしょう。現在我が国のプロテスタント教会における主日礼拝の長さはおおよそ 1 時間程度ですから、300年前のドイツの時間的尺度がいかにかいかに長いかわかります(それゆえ今日の感覚で「マタイ」の演奏時間は長すぎる、と言う苦情(?)も出る訳ですね)。

マタイ受難曲全68曲は(楽譜上何も記されてはいませんが)、物語の進行を理解しやすくするためいくつかの場面(建築で言えば間取り)に分割することが可能で、おおよそ次のような分け方が考えられます。

【第1部】

- 第1曲 導入合唱
- 第2～4b曲 十字架上の死の予告と祭司長らの謀議 (マタイ福音書 26章 1-5節)
- 第4c～第6曲 ベタニアの女による塗油 (同 6-13節)
- 第7, 8曲 ユダの裏切り (同 14-16節)
- 第9～13曲 最後の晩餐 (同 17-29節)
- 第14～17曲 オリーブ山にて (同 30-35節)
- 第18～25曲 ゲッセマネの祈り (同 36-42節)
- 第26～28曲 イエスの捕縛 (同 43-56節)
- 第29曲 第1部終結コラール

【第2部】

- 第30曲 第2部導入のアリアと合唱
- 第31～37曲 大祭司の尋問 (マタイ福音書 26章 57～68節)
- 第38～40曲 ペトロの否認 (同 69～75節)
- 第41, 42曲 ユダの最期 (マタイ福音書 27節 1～6節)
- 第43～52曲 総督ピラトの審問と磔刑判決 (同 7～26節)
- 第53, 54曲 鞭打ち (同 27～30節)
- 第55～57曲 十字架の道行き (同 31, 32節)
- 第58～60曲 十字架上のイエス (同 33～44節)
- 第61～63曲 イエスの死 (同 45～58節)
- 第64～66曲 降架と埋葬 (同 59～66節)
- 第67, 68曲 告別と終曲合唱

以上のように、第1部はイエスが自らの死を予告する場面から、ユダの裏切りによって捕縛される(預言の成就)までを描き、第2部は大祭司に続き総督ピラトによる審問から磔刑判決、そしてイエスの死と埋葬までが物語られます。各場面は基本的にエヴァンゲリストの朗唱に始まる聖書の言葉が、独唱者(登場人物)のソロと合唱を交えて語られ、自由詩によるレチタティーヴォやアリア、もしくは4声の単純コラールで締めくくられる、という構成になっています。(次回に続く)

【後記】先日、筆者がかつて浜松で音楽活動をしていた時からの盟友、河野周平氏のインタビュー記事を偶然ネット上で読みました(「ふじのくに音楽文化情報サイト」)。同氏は現在浜松バッハ研究会の代表を務めています。その話の中で筆者の名前と共に、1976年3月21日(バッハの誕生日)に浜松で初めて「マタイ」を上演したことが触れられていました。それから今年でちょうど40年、忘れかけた記憶が鮮やかによみがえり、思わず胸を熱くしました。(新井)